丸善創業 150 周年記念「學 鐙」1897－2018

収 録 資 料：全1274冊　第1巻（創刊号：明治30年3月）～第115巻（平成30年12月）
※ 大正12年8月～13年5月は関東大震災のため、昭和19年1月～25年12月は戦争のため休刊。

編集・発行：丸善雄松堂株式会社／丸善出版株式会社

価　　格：同時1アクセス ¥600,000（本体）　同時3アクセス ¥900,000（本体）

発　　行：2019年1月

好評配信中!

Web アクセス型電子書籍閲覧サービス

Maruzen eBook Library

学外からPC、タブレット、スマートフォンでアクセスできます　※ VPN 接続やリモートアクセス機能を使用

気になる言葉で全文検索。「學鐙」全1274冊の中から瞬時に該当する本を抜き出します。

●シリーズ内検索
閲覧中の冊子だけでなく、他の号も含めて検索したいならシリーズ内検索。フリーワードで探せます。

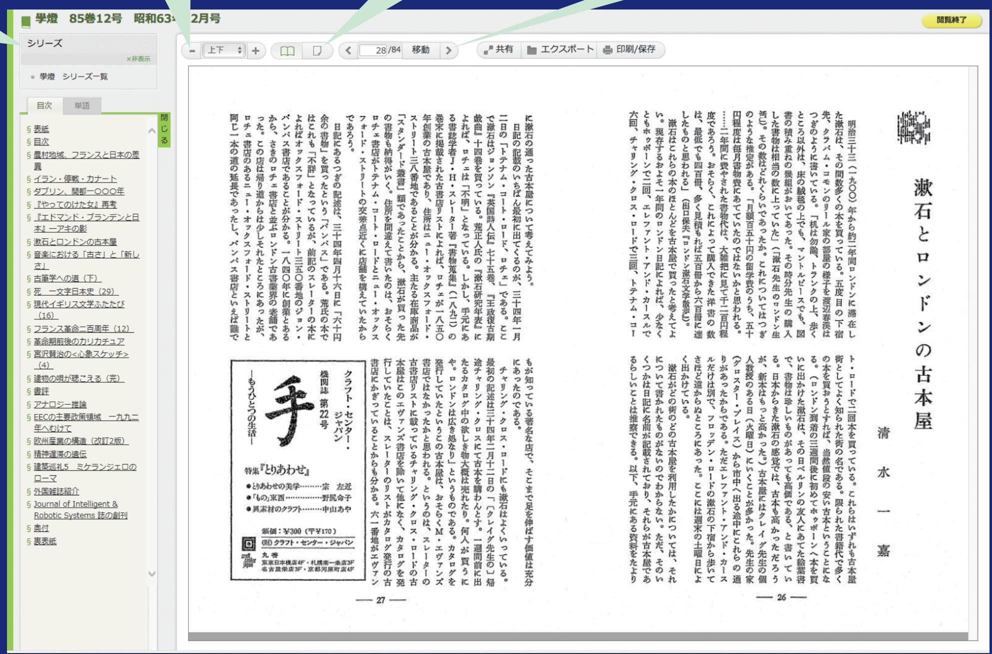
●拡大・縮小ボタン
%指定のほか、画面上下／左右いっぱい表示もあり。

●表示切換ボタン
冊子体のレイアウトを再現
単ページ表示と見開き表示をボタン１つで切換可。

●ページ送りボタン
サクサク進むページ送りでストレスのないスピードで読み進めることができます！

●目次検索と単語検索
閲覧している冊子の読みたいページを、目次やフリーワード検索で探せます。
下線部をクリックすれば、目的のページにジャンプできます。

閲覧イメージ



「學鐙」85 巻 12 号（1988 年 12 月）より

MARUZEN-YUSHODO
丸善雄松堂株式会社学術情報ソリューション事業部 Maruzen eBook Library 担当
Tel：03-6367-6008　Fax：03-6367-6184　e-mail:ebook-i@maruzen.co.jp
営業時間：9：00～17：30（土・日・祝日、年末年始を除く）

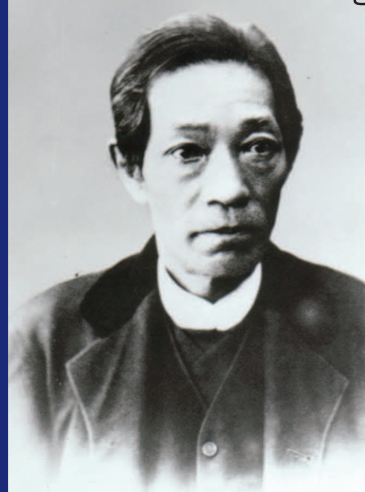
2020.06

Maruzen eBook Library

未知をひらく、これからも。
150th
MARUZEN

丸善創業 150 周年記念
學 鐙
1897－2018

丸善は1869年の創業以来、書籍や文物の輸入を通じて西欧文化の窓口の役割をはたしてきました。
丸善発行の「學鐙」は、1897（明治30）年3月の創刊以来現在まで続く国内最古の企業PR誌です。
その120年のあゆみは、一企業のPRを超えて我が国の文化、文学、芸術、社会等の分野で歴史をたどることのできる貴重な誌面です。
このたび創業150周年を記念して電子ブックとして公開いたします。



丸善創業者
早矢仕有的（1837－1901）

左より
創刊号（明治30年3月）
大正2年3月号
創業100年記念号（昭和44年1月）

MARUZEN-YUSHODO

内田魯庵

◆ この顔ぶれは日本の近・現代の文化史である

明治の文豪から現代の医学者、人類学者、建築家、政治学者、音楽評論家まで各時代の旬な書き手が勢揃い。

◆ 広告史、デザイン史の資料としても

オノト万年筆、アテナインキ、ローヤルタイプライター、モンロー電動計算機…当時の最先端情報機器のイラスト・写真満載。コピーライティングも秀逸。

◆ 輸入洋書リストは、そのままあらゆる分野での西欧文化・文明の受容史である

農学、工学から文学、哲学まで明治30年4月より毎号掲載。
(Book of the Month, Monthly Bulletin of International Bibliography, Announcementなど)

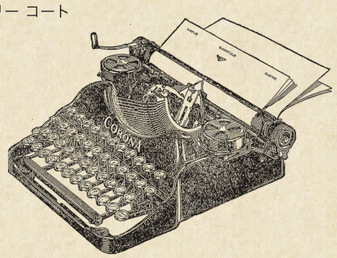
◆ 憧れの西洋は丸善にあり！

書物から水着まで"舶来品"ならなんでも揃う丸善150年のあゆみ

◆ 日本の読書人は何を読んできたか

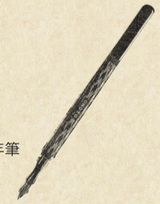
ブックリストが語る近代読書史

バーバリー コート



コロナ タイプライター

化粧品
(ミルク・オブ・キウカムバア)



オノト万年筆

明治30年に創刊された「學の燈（まなび ともしび）」が、本格的な学術エッセイ誌としての内容を整えたのは「學燈」と改めた明治35年（明治36年よりは「學鐙」）、作家・文芸評論家として活躍していた内田魯庵を編集長にむかえてからである。この年の執筆者には、坪井正五郎・坪内雄蔵・戸川残花・志賀重昂・森林太郎・井上哲次郎などの名前が見える。昭和5年よりは水木京太、戦争末期から戦後数年の休刊の後、26年から本庄桂輔が編集にあたり、我が国を代表する学者・作家・言論人が寄稿して明治・大正・昭和・平成の四代にわたる文化の証言者としての意義は計りしれない。

また、本誌に併載された、世界各国の新刊案内は、当時の洋書受容状況と我が国の学問の推移を示唆して貴重な資料である。

加えて文具・用品など、幅広い文化用品輸入の歴史が、その時代の先端をいく斬新なデザインとともに如実に語られている広告も見逃せない。

創刊号（明治30年3月）　明治36年5月臨時号　大正4年10月号　大正14年1月号　昭和6年11月号　昭和26年1月号　昭和30年5月号　昭和35年2月号　昭和50年3月号　昭和56年7月号　平成15年1月号　平成29年春号

文化の博物館

安藤　宏

丸善のＰＲ誌でもある「學鐙」は、まさに近代の文化の見本市でもある。丸善は明治2年に横浜にて創業、翌明治3年日本橋に開店し、多くの輸入品を扱った。特に二階の洋書部は西洋文化の窓口の役割を果たし、田山花袋の回想録、『東京の三十年』の中にある「丸善の二階」の章は、花袋がモーパッサンに目覚め、自然主義に開眼した現場の息吹を生々しく伝えてくれている。「學鐙」もまたこうした〝できごと〟をさながらに体現し続けた舞台であり、特に明治35年に内田魯庵が編輯者になってからは、多くの文学者、文化人が執筆した。例を挙げればキリがないが、夏目漱石の「カーライル博物館」（明治38年１月号）などは、まさにこの雑誌の性格を象徴的に示すものでもある。漱石がカーライルの自宅の展示を通して彼の偉大な面影に触れたように、「學鐙」もまた、それ自体が西洋近代と出会う〝博物館〟の役割を果たしてきたのである。その文化の裾野は計り知れぬものがあり、多彩な執筆者、記事、事象にトータルに検索がかけられるようになったことの意義はまことに大きい。

（東京大学文学部教授）

学の背に乗るための鐙として

池内　了

大学に入学して最初の２年間は教養課程で、これから専門とする予定の理系分野だけでなく、文系や社系など幅広い学問の沃野が広がっていることを知り、貪るように多くの本を読んだ。これが私の大きな財産になっているのだが、その頃「學鐙」を手に取るようになったのではないかと思う。小雑誌であるにもかかわらず、さまざまな分野の入門的解説から最前線の話題までが、あるいは「○○学」成り立ちの歴史的経過から現在の新展開までが、素人である私にも納得するように書かれていて、すんなり飲み込めたという記憶があるからだ。それぞれの号に「特集」が組まれており、それに絡まるキーワードで連想ゲームのようにイメージが広がっていったことが功を奏していたのだろう。学の背に乗るための鐙の役を果たしてくれたのである。今や教養部はなくなり、専門分化が進む一方になっているのだが、「學鐙」が果たしてきた学問の「火を点す」役割を続けていって欲しいと思う。

（総合研究大学院大学名誉教授）

読書空間の創出――「學鐙」の120年

石川　巧

日本の舶来文化は丸善から始まる。洋書はもとより、文具雑貨の数々を輸入販売した丸善が近代の学術研究に果たした役割は計り知れない。

「學鐙」は、その丸善が1897（明治30）年3月に創刊し、現在まで120年以上継続しているＰＲ雑誌である。関東大震災やアジア・太平洋戦争による休刊を挟んでいるが、その歩みは日本の近代史そのものを包括している。

「學の燈（まなび ともしび）」として創刊した当初、洋書の案内を主とする目録雑誌だった「學鐙」は、1901（明治34）年に丸善の顧問となった内田魯庵が編集を担ってから誌面が刷新され、坪内逍遥、夏目漱石、森鷗外、谷崎潤一郎といった文豪が寄稿する随筆雑誌に成長した。

だが、「學鐙」の最大の功績は読書の方法とその重要性を広く伝播したことにある。読書は世界を開明し人生を豊かにするための手段であると説き、それに必要な書籍や文具を読者のもとに届けたことにある。

「學鐙」が電子化されれば、日本における舶来文化の移入過程を通史的に検証することができるようになる。全文検索を駆使して近代の読書行為にまつわる厖大な言説を集約することも可能になる。商品を販売するためのＰＲ雑誌であるがゆえに、「學鐙」は人々が求めていたものの本質を照らし出しているといえるだろう。

（立教大学文学部教授）